

## 後漢黨錮事件の史評について

増淵龍夫

後漢末におこった黨錮事件は、單に黨派の争いではなく、當時の政治權力をにぎっていた宦官勢力による政治の紊亂と腐敗に對して、清流官僚・太學生が當時の知識階級の全國的輿論の支持のもとに、きびしい批判と肅正とをおこなおうとした一種の政治改革運動であるところ(1)に、その積極的な意味がある、と解する近時の見解がある。そのような知識階級の輿論すなわち「清議」は、宦官勢力による選舉請託の横行によつて、まきおこされたのであった。漢代の官吏登用の法である郷舉里選は、各地方の德行ある者を、郷黨の輿論にもとづいて地方官が選び、これを中央に推舉する制度であつて、これは、徳ある者を賢とし、賢者をあげ用いることを説く儒教思想

の制度化であつた。ところが宦官勢力が中央において權力をにぎるに及んで、地方官に壓力をかけて、自己の一族や、それと結託する地方土豪の無學無能な子弟を推舉させ、自己の勢力を官界に扶植することををはかることがさかんになると、ここに郷黨の輿論は無視され、選舉腐敗が一般化することになる。このような傾向に對して憤激する郷黨の知識階級は、彼らの奉ずる儒教的價值規準から、あらためて「正當」な人物評價を行い、たがいに標榜し合つて、その輿論によつて、宦官勢力の腐敗政治を批判する。所謂「清議」がここに起ることになる。このような「清議」による人物批評は、單に郷黨の人物についてのみ行われることにはとどまらなかつた。當時中央の太學には、三萬餘の學徒が全國の各地から集り、また各地方には多くの學者がいて、私塾を開き、それぞれ、

數百・數千の門下生を集めていた。かれら學徒は、良師を求めて、各地を遊學する風がさかんで、そこに師弟關係や交友關係を通じて、個々の郷黨を越えた、知識階級の廣い輿論形成の場が用意されていたのである。これら太學生の領袖である郭泰・符融等は、最も人物鑒識にすぐれていたという。彼らは各地をめぐり、各地の知識階級の名士と交結し、それぞれの郷黨の人材を採掘したばかりでなく、彼らの人物評價は、中央・地方の政治の衝にあたる高官たちにも及んだ。人物批評の形における政治批判が、太學生を中心とする知識階級の間にかわめてさかんになるのである。そのような人物評價について彼らの形成する輿論は、すでに官界において無視することのできない力をもつにいたった。彼らの貶議をおそれて、彼らの門をたずねて交りを求める高官たちも多くあったという。彼らが、その人物批評を通じての現實政治批判において、最も支持し稱讚するところの一群の人士は、宦官勢力の暴政下にあつて、それに抗し反撥する清節ある所謂清流官僚である。清流官僚の領袖は陳蕃・李膺である。彼らは、太學生をはじめとする知識階級の輿論の支持のもとに、多くの抗直な人材を登用して、宦官勢力

の肅正に向い、或は宦官の一族の不法行爲を摘發し、或はそれと結ぶ地方の群小勢力を誅滅することを開始する。このような清流官僚の實力をもつてする肅正運動とそれをバックする太學生をはじめとする知識階級の廣範な政治批判の輿論は、權力をにぎる宦官勢力の挑發を結果し、ここに清流勢力に對する彈壓が開始される。最初の彈壓は主として清流官僚勢力に對してなされたが、やがて彈壓の手は、太學生にもおよび、彼らは黨をむすんで朝廷を誹謗し風俗を攘亂する黨人として、獄につながれることになる。所謂黨錮である。この黨錮事件とほぼ時を同じくして、東の方から大規模な農民叛亂が起つてくる。彈壓を逃れた知識階級の餘黨がこの農民叛亂に合流することを恐れた宦官勢力は、黨人追求の手をゆるめて、黨人の禁を解くのではあるが、時すでに、後漢王朝は崩壊寸前に迫られていたのである。

このように近時解される黨錮事件の所謂清流勢力對濁流勢力の争いは、當時の國家社會の全體構造の中で、どのようなものとして理解すべきであらうか。

一つは兩勢力のそれぞれにおいて、根幹となり實際上の力をもつものは豪族であるとして、この兩勢力の對立

を、宦官豪族と官僚豪族との政權掌握をめぐる争いと解する見解がある。<sup>(2)</sup>そこでいう豪族という概念はきわめてあいまいであるが、當時の宦官は、多く侯に封ぜられており、例えば單超は二萬戸、徐璜・具瑗は、各一萬五千戸、左棺・唐衡は、各一萬三千戸の封を食み、養子襲爵も許され、またその一族姻戚は所謂選舉請託によって州の刺史や郡國の守相の地位を占めるものが多く、またこれに阿附する郡小の地方豪族も多かったから、宦官勢力の中核を一種の豪族と見られないことはない。しかしながら、宦官がそのような権力をもつにいたったのは、彼らが豪族であつたからではない。それは君寵によつて與えられたものであり、君寵をぬきにすれば、彼らは何の力もない近従の微官にすぎない。他方、その意味で彼らの勢力の基幹をその豪族性に求めて、それを説明しようとすることは誤りとしなければならぬ。清流勢力の中核をなすものが豪族であることは、必ずしも不當ではない。清流官僚の領袖李膺は潁川の豪族であり、彼れ自身多くの門生故吏をもつばかりではなく、その師である荀淑も亦潁川の名族で、多數の門生を擁する潁川士大夫の巨頭であり、また、荀淑とならんで潁川の知識階

級の歸慕するところであつた郡の大姓鍾皓は李膺と姻戚關係にあつた。さらに李膺は、太學の游士の領袖で各地の知識階級と廣い交友關係をもち高い聲望をもつていた郭泰・符融等と堅い交結をむすんでいたのであつて、彼の勢力の背景には潁川の豪族集團ばかりでなく、門生故吏やその交友關係によつて、全國的規模にひろがる知識階級の人的結合の支持があつたのである。清流の個々の人士がすべて豪族であつたのでは決してないが、豪族の勢力というものを、單に同族的結合や大土地所有によるばかりでなく、それに依附する廣い人的結合關係に基礎をおくものと考えらば、清流勢力の人的構成を、廣い意味での豪族的社會關係に求めることは、必ずしも不當ではない。「李膺等は、太學の游士を養ひ、諸郡の生徒と交結し、更相驅馳して、共に鄉黨を爲し、朝廷を誹訕し、風俗を疑亂す」ということは、宦官勢力が李膺等の清流勢力を非難した誣告のことではあるが、その勢力の人的基盤については、そのように見られても止むを得ない實際の關係があつたのである。さき私には清流官僚には知識階級の全國的規模の輿論の支持があつたといつたが、その輿論形成の基礎にはそのような人的關係が

作用していたのである。しかしながら、清流勢力の構造をこのように社會史的に分析して行つても、黨錮事件のもつ意味は必ずしも明らかにならない。清流勢力の中核がそのような家族的社會關係をとるものではあつても、それが宦官勢力に反撥する一つの力に結集したのは、豪族としての共通の利害關係からではない。問題を豪族ということに局限すれば、宦官勢力に結託する多くの地方豪族もいたのである。清流の人士が地方豪族の門から出ることが多かつたにしても、彼らを宦官勢力に反撥する一つの勢力に結集したのは、清議であり、彼らは官僚あるいは官僚志望者として、儒教的國家理念を奉ずる知識階級であつたからである。ここに、黨錮事件は、單なる豪族間の黨派の争いではなく、儒教的價值規準による當時の知識階級の主體的な政治批判運動である、という冒頭に記したような解釋がおこつてくるのである。儒教は、前漢武帝のとき公認されて官僚の指導理念となつたが、それが廣く普及したのは、後漢に入つてからである。殊に順帝のとき太學が修起され、質帝のときは太學生は三萬餘人に増加し、大將軍以下六百石にいたる官僚に令してことごとくその子をつかわして、太學に學ばしめた。

この外、地方の各地にも私人の學舎が多く開かれたことは前述の通りである。彼らの學ぶ儒教の教えによれば、漢の政治秩序は、天人相關の理論によつて基礎づけられ、天子一尊のもと、有徳なる賢者が官僚としてその徳治をたすける體制として觀念されていた。君主の大權は當然天子以外の者によつて左右されてはならず、爲政者たる官僚は、郷黨の聲望ある賢者が任せられなければならない。それは、漢の國家權力を正當化する理論であつたのであるが、それが現實の紊亂した政治の在り方に向けられるとき、現實の權力者に對して、するどい批判の刃となつて作用する。清議は、當時の知識階級のこのような指導理論から發したのであり、清流官僚・太學生をはじめとする當時の知識階級を、政治を紊亂する宦官勢力に反撥する、一つの清流勢力に結集せしめたのは、このような清議である、というのである。この解釋は、黨錮事件における清流勢力を、その指導理念にかけて理解しようとするすぐれて主體的な解釋であるが、當時の知識階級の現實の動きを、やや理念化してとらえたきらいがある。當時の知識階級の動きは、實は決して一様ではないのである。宦官勢力に反撥する所謂清流官僚を支持

し、かれらとむすんで時政を譏議する、太學生をはじめとする當時の知識階級の外に、同じく儒教的教養をもつて、それとは別個な行動をとる、そしてそのような太學生の動きにはむしろ批判的な、一群の知識階級もいたのである。徐穉・姜肱・袁閔・魏桓・申屠幡等の逸民的風格をもった人士がそれである。彼らはみな郷黨に聲望ある篤行の士であるが、清流官僚の領袖陳蕃の徵召にも應じない。かれらは、たびたびの徵召にも辭して、終身仕えないという逸民的生活態度を固く持することにによって、宦官勢力に對しては勿論のこと、これを譏議する一般の知識階級の風潮にも、批判的な態度を暗黙の中に示している。このような彼らの行動様式は、上述のような清流勢力の理念化的解釋からは、説明されない。清流勢力の指導理念とされる儒教的價值秩序の中には、このような生活態度による暗黙の政治批判も、然るべき場所を與えられていたのである。しかもかれらは、そのような生活態度によって、宦官勢力と抗争する所謂清流勢力の行動に對しても批判的姿勢をとっているのである。彼らは、どのような意味において、當時一般の清議の風潮に批判的であったのだろうか。何故に、かれらは清流官僚

の巨頭陳蕃の徵召にも應じなかったのであろうか。このことが明らかになれば、清流勢力のもつ一つの側面を知ることができるし、また黨錮事件における清流對濁流の抗争を當時の國家社會の全構造の中で位置付ける一つの視點が暗示されることにもなるのではないかと考えられる。ところで問題は、事實より意味の問題とかわるのであるから、そのことを明らかにするに十分な程、彼らの言動はくわしくは史料にのこされてはいない。後漢書の彼らについての記述はきわめて類型的であるといつてよい。そこで、きわめて廻り道になるのであるが、彼らの行動を肯定し、しかも自身彼らと同じような逸民的傾向をもった後世の人士の、黨錮事件に對する史評を、先ずとり上げて検討してみよう。

- (1) 川勝義雄「シナ中世貴族政治の成立について」史林三三ノ四、一九五〇。宇都宮清吉、書評「楊聯陞『東漢の豪族』」東方學報京都九、一九三八。
- (2) 楊聯陞「東漢の豪族」、清華學報一一、一九三六。

二

資治通鑑卷五三、後漢質帝本初元年の「夏四月庚辰、

郡國に令して明經を擧げ太學に詣らしめ、大將軍より以下、皆子を遣はして業を受けしむ。……是より遊學増々盛んにして三萬餘生に至る。」の條に、胡三省は注してつぎのごとく云っている。「此れ鄧后朝に臨みしときの故智なり。梁后踵ぎて之を行えるのみ。游學増々盛んなるも、亦名を干め利を踏むの徒なり、何んぞ尙ぶに足らんや。或ひは問うて曰く『太學の諸生三萬人、漢末互に相標榜す、清議此においてか出ず。子は盡く以て名を干め利を踏むの徒と爲す、可ならんか。』答えて曰く『積水淵を成し、蚊龍生ず。其の間に其の人なしと謂うは不可なり、然れども互に相標榜する者は、實は名を求め利を踏むの徒の爲す所也。』李膺の諸人を禍いする者は、太學生に非ず、諸生は其の節を立てるを見て、從いて標榜し、以て清流を重んずるのみ。』然らず。則ち郭泰・仇香も亦太學に遊ぶ、(郭)泰は且(仇)香を拜して之を師とせんと欲す。(郭)泰は八顧の首と爲るも、(仇)香は曾つて標榜の列に預らず。豈清議は尙ぶに足らざんか、抑も(仇)香の隱德は名とし能うこと無きか。』

胡三省は宋末元初の人であるが、その履歴は殆んど傳わっていない。宋史にも傳はない。その著述も多く傳わ

らず、傳わっているのは通鑑の注と釋文辨誤のみである。これとても音訓の學であるとして、あまり注意されなかつたのであるが、清朝考證學がさかんになるに及んで、この胡三省の通鑑の注は地理の考證にきわめてすぐれているとして、世に稱せられるにいたつた。しかし、胡三省の注のすぐれているのは、單にその地理の考證においてのみではない。南宋末の朋黨の争いと政治の腐敗の下に生き、宋朝の覆滅と蒙古の占領支配下における人々のさまざまな動きを目のあたりに見て、そのきびしい生活の體驗と心情をもつて、通鑑を讀み、注をつくつたのである。そこには、したがって、過去のさまざまな歴史的事件やそこにおける人々の動きについて、その現實的體驗からの感慨と洞察にとむすぐれた史評が、きわめて簡潔な形で、多くのべられているのである。最近陳垣はその「通鑑胡注表微」において、このような胡注の、從來無視せられていた一面に注目し、胡三省がどのような意圖のもとに、またどのような用意をもつて、通鑑に注したのかを、彼の簡潔な注の中から引き出そうとした。すなわち、陳垣は、胡三省が注した通鑑の個々の記事と、何らかの意味で類似する宋末元初の史實を搜集し、胡三

省が見聞したであろう同時代の諸事件の中に、彼の通鑑の注をおいて、彼の注の意圖するところを、彼の歴史解釋の現實的基盤から推定しようとしたのである。それは、いわば胡注の疏の形をとるきわめて簡潔な記述ではあるが、そこには歴史理解のきわめて暗示にとむ視點が提示されている。そして、陳垣自身が、日本軍の北京占領下の、暗黒の世情の下において、通鑑胡注をひもとき、はじめて胡三省の心情を體得した、といっていることも、興味深い。陳垣の仕事は、いわば胡注の疏の形をとるものであり、胡三省の注した通鑑の記事の解釋を目的としたものではなく、いわば微言大義的に、胡注の意圖するところを明らかにしようとするものであるが、そこには歴史理解のきわめて暗示にとむ視點が提示されている。今、このころみに、胡注や陳垣の「疏」に提示されている史評的視點を媒介として、後漢末の知識階級の動きを當時の事に即して檢證して行ってみよう。

後漢の質帝のとき、太學の學生は三萬餘人の多きに達した、という通鑑の記事を注して、胡三省は、彼等の多くは名を求め利を蹈むの徒であるから尙ぶに足りないといいい、これらの太學生が中心になって清議をなしたので

はないかという反問に對して、郭泰も仇香も太學に遊んで、しかも郭泰は仇香を拜して師となしたが、太學生の人物評價の番付には、郭泰は八顧の筆頭にのせられているのに、仇香は番付にもせられていない。かれらの清議が大したものではないのか、それとも仇香の隱徳は彼らにとって標榜する意味がないのか、と答えて、彼らの清議の動機・人物評價の規準について大きな疑問を出している。胡三省のこの史評が、何を意味するか、先ず後漢時代の史實について檢討してみよう。

仇香（一名仇覽）と郭泰とのことは、後漢書循吏仇覽傳にくわしくのっている有名な話である。仇香は陳留郡考城縣の人で、少いときより學問をまなび、學は三經に通じたが、きわめて地味で寡黙な人物で、なれなれしく人と交ることを好まないため、知名の士の後援がなく、ために年四十になるまで郷黨でも無名であった。四十歳になつてやっと亭長の職にえらばれると、里民に生業をすすめて、農事おわると、その子弟に學をすすめて、貧困者には賑恤し、率先躬行して、教化につとめた。この徳を以て人を化する彼の治績が漸く郷邑に稱されるに至つたので、縣令の王渙は、彼を召して秘書課長ともいべき主簿

に任じた。王渙は仇香の人物に感じ「今の太學は長裾を曳いて名譽を飛ばし、彼ほどの人物はいない」と考えたが、彼を太學につかわした。仇香は太學に入ると、同郡の符融が、そこでは高名であり、部屋もならび合っていて、賓客がいつも符融の室に満ちていたが、仇香は彼をたずねることもせず、別に話しかけもしなかった。符融は、仇香のそのような態度を見て、心ひそかに珍らしい人物と思ひ、仇香に話しかけてつぎのようにいった。「先生あまたと郡壤を同じくし、房牖を鄰りにす。今京師は英雄四集し、志士交結の秋なり。經學に務むると雖も、之を守ること何ぞ固きか」と。そこで仇香は色を正して「天子が大學を修設せしは、豈但ただに人をして其の中に游談せしめんがためなりや」といひ、高揖して去った。符融は後、そのことを同じく太學の名士である郭泰につげた。郭泰はそれを聞いて符融とともに仇香の部屋に行つて謁し、牀をくだつて拜し、「君は郭泰の友に非ず、郭泰の師なり」といった。仇香は太學で學を畢えると仕官を求めず郷里に歸り、また州郡から徵召されても、みな辭して仕えなかつた。

以上が大體、後漢書の仇香傳や海内先覽傳の記すとこ

ろである。これにより、當時の太學は、英雄四集し、志士交結の地であり、太學生は長裾を曳き名譽を飛ばし、經學よりも遊談が盛んで、太學の名士の室にはつねに賓客にみちていたことを知る事ができる。太學は一條の仕官のための道である。公府の辟召にあずかるためには名譽を擧げなければならない。ここに名士に交りを求め、さかんに游談し、交結・游談によってその才能を示さなければならぬ。當時の太學の名士符融・郭泰は、清流官僚の巨頭李膺の門徒である。李膺傳に「是時、朝廷日に亂れ、綱紀頽弛し、(李)膺獨り風裁を持し、以て聲名自ら高し、士の其容接を被る者有り、名づけて登龍門と爲す」と記されているように、當時の仕官を求める人々のすべてが理想し樊登するところの龍門であつた。當時の太學生は、直接李膺に接することは容易ではない。かれらは李膺の門徒であり、且つ人物鑒識に定評のある名士である、符融・郭泰に交友を求めて、その室にみち、政治批判を高談し、それぞれその才能を示めそうとしたのである。胡三省が、「名を干めて利を踏むの徒だ」といったのは、これらのことをさすのであろうか。

太學生のさかんな交結・游談は一種の風潮となつた。



遊談の對象は、人物批評であり、政治批判であり、「清談ここにおいてか出ず」である。彼らは互に標榜しあつて、天下の英俊三十五人をえらび、その格付けを行った。三君・八俊・八顧・八及・八厨がすなわちそれである。それは、政府の任命とは別個に、彼ら自身の價值規準による人物推薦を意味し、事實上政權をにぎる宦官勢力に對する、痛烈な政治批判を意味するものであった。この太學生自身の價值規準による人物番付の中に、郭泰は八顧の筆頭に擧げられている。顧とは能く徳を以て人を引く者をいう。しかるに、郭泰が拜して師とした仇香は、この番付のいづれにも列せられていない。太學生の清議は尙ぶに足りない、胡三省はいうのである。しかし、その論法で行けば、仇香は四十歳になるまで、郷黨の輿論でも問題にされなかつたのであるから、郷黨の清議もまた尙ぶにたりないことになる。名と實とがすではなれていたのであろうか。このことを検討するためには、清議そのものの社會的構造にふれなければならない。

清議は、宦官勢力の選舉紊亂に反撥する知識階級の、人物評價の形式をとった輿論であり、それは選舉本來の趣旨にもとづく儒家的價值規準を立前とすることから、宦官勢力の私利結託による選舉請託に對すれば、公論でもあった。それは郷黨郡國より生じて、京師・太學にまでいたつた。しかしこのような公論をささえる社會的基礎はどのような構造をとつたか。范曄はその後漢書黨錮列傳の序において、太學の清議の形成過程をつぎのよう

「初め桓帝、蠡吾侯たりしとき、學を甘陵の周福より受く。帝位に即くに及んで、周福を擢んで尙書となした。時に同郡の河南尹房植は當朝に名あり。郷人之が謠を爲りて曰く『天下の規矩たり房伯武、師に因り印を獲たり周仲進』と、二家の賓客、互に相議揣し、遂に各々朋徒を樹て、漸く尤隙を爲す。是れ由り甘陵に南北部あり。黨人の議、これより始まる。後、汝南太守宗資、功曹范滂に任じ、南陽太守成瑨も亦功曹岑暉に委ぬ、二郡又謠を爲りて曰く『汝南太守は范孟博、南陽の宗資は畫諾を主る。南陽太守は岑公等、弘農の成瑨は但坐して嘯く』と。此れに因り、流言轉入す。太學の諸生三萬人、郭林宗・賈偉郎、その冠と爲す。並びに李膺・陳蕃・王暢と更相褒重す。學中の語に曰く『天下の模楷李元禮、強禦を畏れざるは陳仲舉、天下の俊秀は王叔茂』

と。」

ここで注意すべきことは、すでに指摘されているごとく、太學の清議、すなわち郭泰等を領袖とする太學生の人物評價は、風謠(1)の形式をとって表現されたえられて行くということであり、それは、甘陵やその他の郷黨の輿論が風謠をもつて表現されているのと全く同じ關係にある、ということである。甘陵郡の名士周福と房植とについての所謂郷黨の輿論が、風謠の形をとってそれぞれの家(2)の賓客の間から起り、かれらの賓客によってささえられ、それが互に主家を標榜して他を譏り合つて、やがて甘陵郡は南北の兩部にわかれて朋黨を形成するに至つた、ということは、所謂郷黨の輿論というものが、現實にはどのような社會關係の上につくられて行くか、ということを私たちに示すものである。天下の名士李膺・陳蕃等についての太學の輿論も、全く同じ關係にあることを前述の范曄の序は示しているわけであつて、太學生の領袖郭泰・符融は、李膺のいわば門徒・賓客である。それらは輿論といい、公論といつても、それをささえる中核的な社會基盤は當時の固有な社會關係によって規制されていたのであり、郷黨の輿論は、當時における郷黨の

社會構造それ自體によって規制されていたのである。

すでに後漢に入ると、郷邑の秩序は豪族によって維持されていたといつてよい。もっとも豪族といつても大小さまざまであるが、それは嘗て明らかにしたごとく單にその同族的結合によるだけでなく、それに依附する多數の賓客よりなる人的結合關係によつて、一般の邑人の上にも大きな規制力をもつていたのである。「陳留郡圉縣の高氏・蔡氏は並びに皆富殖で、郡人畏れて之に事えたが、夏馥は門を比べていても、彼らと交通しなかつたので、豪姓の仇する所となつた」といふようなことは、そのような關係を示すものである。殊に單なる土豪ではなく、郷黨の名士といわれる學識ある家には、多くの門徒・門生がこれに依附するわけで、所謂郷黨の輿論といふものは、そのようなサークルの中から作られる場合が多かつたのである。潁川の荀爽の兄弟八人について、「荀氏の八龍、慈明無雙」といふ風謠が潁川につたえられたが(後漢書荀爽傳)、荀爽の父荀淑は潁川の名族で博學な學者であり、多くの賓客知友と門徒・門生をもつていたのであつて、荀爽兄弟についてのそのような風謠の生れた基盤は、もちろん荀爽兄弟の才能德行にもよる

が、それは荀氏のもつ廣い諸關係の中から生れ、またささえられていたものと考えられる。したがって、いかに學識德行にすぐれていても、これらの背景をもたない単微な貧士は、これら郷黨の輿論を左右する名士にみとめられることが、先ず必要であったのである。上述の仇香が、年四十になるまで郷黨で認められず、四十になつてやっと縣の小吏である亭長の職についたということは、彼が滄黙で終身なれなれしく人と交わることを好まなかつたということにも一つの理由があるのである。潁川の陳寔が、仇香と同じく單微の出身で亭長の職にあつたが、彼がやがて潁川の名士になつたのには、同郡の名族で門徒千餘人を擁する鍾皓との交友關係があつたことが力であつたことは、周知のところである（後漢書陳寔傳）。ここに郷黨においても、京師の太學においても、交結と遊談がさかんに行われ、門生・故吏の關係が、重要な社會的意味をもつてくることになる所以がある。ところで、太學生や郡國の諸生の交會・遊談の盛行は、それによつて、より名のある名士に自己を認めてもらい、それぞれのサークルにおいて自己の名聲を高めようとするところから起ってくる現象であるが、そこにおける人物評價の

規準は、いうまでもなく名教的な徳目である。孝とか徳とかいうことが、そのような交際場裡における人物評價の規準となり、そしてそれによつて郷黨の名聲を博し、また察舉にもあずかれるということになると、そのような徳目は、本來もつその現實的意味をはなれて、名目化し、外在化して行く、そしてはなはだしい場合には、許武や趙宣、或は晋文經や黃子艾のような、作爲をもつてまでして、虚名をもとめる矯偽の士も出てくるのである。このような當時の知識階級の所謂「浮華・交會」の風潮に對しては、すでに當時の知識階級自體の中からきびしい批判が出ている。耿介として俗に同ぜず終生官につかえなかつた王符の『潜夫論』の「交際」・「實貢」の諸篇や、徐幹の『中論』の「謹交」・「考偽」の諸篇には、當時の太學の風潮に對しても、あたるところの批判が多くあるのである。太學における前述の仇香の言動とその後彼の生涯における生活態度は、そのような當時の一般の風潮に對する抗議として、理解してよいのであろう。それは、當時の知識階級の「浮華・交會」的風潮にみられる儒教的價值規準の名目化と外在化の一般現象に對して、眞にその價值規準をもつて自己を律する者のとらざ

るを得ない態度であつたのであろう。

價值規準の名目化と外在化の一般的現象は、しかしながら、一方においては、それが價值規準として信奉される限り、それを媒介として成立する人的關係においては、それが特定の人物に託されて、その人物に對するいわば盲目的崇拜と追隨を生むことになる。所謂名聲の起るのは、そのような一般的現象を基盤とするものであり、風謠の起るのも、そこからである。郭泰が、李膺と同舟して河を渡ったとき、それを送った衆賓は、これを見て神仙となした、というのは、そのような現象の表れである。

その意味で、價值規準のもつ批判力は、それが名目化され、外在化すればする程、對内的にはにぶつて、それを信奉する黨派的勢力を形成せしめるのではあるが、逆に對外的には、その名目の固定的信奉の故に、その名目を以て他を批判する形において、一層きびしく發動されるのである。太學生の清議とその「浮華・交會」的一般的風潮は、自己をきびしく律する一部の知識人からは、名を求める徒として上述のような批判をうけたのではあるが、彼らの價值規準の名目を蹂躪する宦官勢力の専横に對しては、激昂的な批判力として作用したのである。そ

の意味で、太學における清議は、それが黨派的形態をとるものではあれ、儒教的價值規準からする政治批判運動としての意味をもっていたのである。

しかしながら、問題をもとにもどして、胡三省が、太學生を「名を干め利を踏むの徒」と非難したのは、單に、以上のような彼らの「浮華・交會」的現象をさしているだけではなさそうなのである。

(1) 風謠については、侯外廬・趙起彬・杜國庠・邱漢生「中國思想通史」第二卷(一九五七)第十章第三節「漢末の風謠題目與清議」参照

### 三

胡三省が、通鑑の注において、後漢の太學生の上述のような動きを、「名を干め利を踏むの徒」と解したその意味を付度するために、最近陳垣は、その「通鑑胡注表微」において、胡三省がその生時見聞したのであろう、南宋末期の太學生の動きを、癸辛雜識後集より引用して、次の如くいつている。

「癸辛雜識後集に言う『南宋の時、三學(太學・武學・宗學)の横、一時の權相、史嵩之・丁大全の如き

と雖も、亦未だ之を如何ともするなし。賈(似道)が相となるに至って、其の、力を以て勝つべからざるを知り、遂に術を以て籠絡し、毎に其の恩敷を重ね、其饋給を豊かにし、學田を増採し、種々厚きを加う。是に於て諸生其の利を啖いて其の威を畏れ、(賈)似道の罪を目撃すと雖も、噤して一語も發せず。賈(似道)が君に要めて國を去らんとするに及び、則ち上書して贊美し、意を極めて挽き留め、今日は師相と曰い、明日は元老と曰い、今日は周公と曰い、明日は魏公と曰い、一人の敢えて少しくも其の非を指すものなし。直ちに魯港潰師之後に至り、始めて其の罪を聲す。『嗚呼、此れ身之(胡三省)の謂う所の『名を干め利を踏むの徒』也』と。

南宋末の太學においては、朋黨の餘波をうけて、當時の権力者に對する、種々な政治批判がたえず行われ、太學生はしばしば集團をなして上書し、時の宰相が權力をもつてこれを抑えても、抑えきれない程の力をもつにいたっていた。そこで賈似道が宰相の地位につくと、太學生の饋給を豊かにしたり、學田を増加したりして、恩を施すことによつて、太學生の自己に對する批判を封じよ

うとし、太學生もまたそれによつて賈似道を支持するにいたり、彼が時々辭職願ひを出すと、争つて引きとめて、或は周公といい、或は魏公と云つて贊辭をおしまなかつた、と上引の癸辛雜識後集はつたえている。このような當時の太學生の動きをおそらく見聞していたであろう。胡三省は、通鑑の記す後漢末期の太學生の動きの中に、何かの意味でそれと類似するものを直觀し、「名を干め利を踏むの徒」と解したのであらうと、陳垣はいうのである。後漢末と南宋末とは、そこに區別しなければならぬ、さまざまな歴史的條件の相違はある。しかし、後漢末の太學生の動きの中に、そのような類推を許すような何らかの史實があつたであらうか。

後漢末の太學生が標榜し支持した三君・八俊・八顧・八及・八厨のうち、その最高の三君の筆頭として彼らの稱讚を拍したのは、「天下の忠誠、寶游平」と彼らによつて讚美された寶武である。寶武はその女が桓帝の後宮に入り、やがて皇后となつたことによつて、顯位をさすけられた外戚である。桓帝が崩すると、寶太后は朝にのぞんで、父寶武と禁中の策を定め、寶武は大將軍として、陳蕃を領袖とする清流官僚を重用して、宦官勢力の排除

につとめるのである。ところが、この竇武はかねてから「兩宮の賞賜を得ては、悉く太學の諸生に散じ與う」と後漢書竇武列傳に記されている。南宋末の權相賈似道が、恩誅をもって太學生を籠絡したことは意味は異なるが、しかし、胡三省や陳垣の上記の解釋が、もしも、竇武と太學生とのこのような關係をふんまえて立てられているのだとすると、竇武は、太學生たちのもつ無視し得ない輿論形成力を利用することによって、その宦官勢力彈壓政策を遂行しようとしたのだ、という解釋がなり立って来る。というのは、竇武の宦官排拆は、清流官僚や太學生の宦官勢力批判が、儒教的價值規準からする所謂清議にもとづくものであるのに對し、一應それとは別個な、宮中における固有な關係としての外戚と宦官との根深い對立抗爭に主として起因しているのである。竇武の前に同じく外戚で大將軍となつた梁冀は、順帝の末期から桓帝の始めにかけて權力をふるつたが、宮中においてかれに對立する宦官勢力のために誅せられた。順帝の前の安帝のときにも、安帝の崩後、閹太后が朝にのぞむと、外戚閹顯兄弟が力を得たが、これも宦官勢力と對立して誅された。安帝のはじめ、鄧太后が朝政にのぞむと、外

戚鄧騭が大將軍となつたが、かれの權力掌握を阻止しようとする宦官勢力の壓力によって自殺しなければならなかつた。さらには、その前の和帝のとき、外戚大軍竇憲は、宦官鄭衆の謀によって誅された。このように宮中における外戚と宦官との争いはきわめて根深いのである。そしてそれは、すでに前漢武帝の歿後から始まる内朝と外朝との分離(1)に起因する、中央政界の根深い問題であつたのである。太學生がその清議において、最高の地位を與えて讚美する竇武について、宮中における外戚と宦官との固有の關係から彼のおかれてゐる地位を、すこしく歴史的に明らかにしておかなければならない。

前漢武帝はその歿前、幼主昭帝の政をたすけるため、その信任する侍中霍光を大司馬大將軍に命じ、幼主昭帝の後見たらしめる。武帝のときの將軍はただ兵を領して出征したのみで、國政に參與することはなかつたが、霍光は大司馬大將軍をもって尙書の事を領し、その一族・幕僚をば、侍中・給事中等の天子近侍の内官を兼ねさせ、幼主昭帝の攝政の名のもとに、宮中、すなわち内朝において國政を壟斷することとなつた。漢初以來、國政の大綱は、丞相・御史夫以下の九卿をもって構成される中央

政府において議せられ、それが天子の裁可を経て、中央政府から郡國の守相に傳達され、そこに天子を頂點とした官僚制度が、組織としての一貫性をもっていたのであるが、この制度上の中央政府の外に、宮中において天子の攝政としての大將軍が、天子近侍の諸臣を自己の統率下において、實際の國政の決定權をにぎることになると、制度上の中央政府は、外朝として單なる事務執行機關と化し、國政の實權は所謂内朝にうつることになる。そして、それとともに、尙書・侍中等の本來天子近侍の職である内官が、大將軍の統率の下に、國政に直接干與することになり、殊に尙書の勢力はいちじるしく、次第に、實質的には内朝の政務の中心となる。このように、中央における政治機構が、實質的な政府である内朝と、制度上の（しかし實際には單なる行政執行機關と化した）政府としての外朝とに二分した、ということとは、全官僚機構の統制に一貫性を缺く結果をもたらした。また官僚層自體のなかに黨派の争いを開く端緒ともなった。すなわち、國政の實權をにぎる者が、執政として、幼小な天子と丞相との間に絶大な權力をもって介入し、天子近侍の内臣をその腹心として掌握下におくことよって宮中に一個の實

質的政府を形成することになると、天子は官僚組織全體から浮いた名目的存在となる。そして當然、幼小な天子がやがて成長して自己の地位を自覺してくると、天子を疎外していた執政の專權に對して反撥を感じ、それに對抗しそれを打破するために、自己の君權をささえる新人的基盤の形成を意圖することになる。ここに、天子の信任を得て登場するのが外戚と宦官である。まず昭帝について立った宣帝は、内朝における霍光一族の專權に對抗するために、從來の權門とかかわりをもたない外戚の許氏・史氏の一族を登用して、内朝の諸内官に配置し、霍光一族の勢力をきりくずして行き、また霍氏の專權に反感をいだく外朝官僚をその統御下において、再び天子獨裁の一方的權力體系を樹立したのであるが、宣帝の死後、元帝にいたると、宣帝がその手足とした外戚が再び内朝を支配するほどの強力な權力にまで成長する。すなわち、宣帝はその歿前、その信任する外戚史氏を大司馬車騎將軍として尙書の事を領せしめ、元帝の政をたすけさせたのであるが、この外戚史氏がさきの霍光と同じように内朝において政權をにぎるに及んで、元帝はこれを阻止するために、一族の勢力をもたない卑賤な宦官石顯

に政をゆだねる。宦者石顯は次第に内朝における實權をにぎり、中書僕射牢梁・少府五鹿充宗・御史中丞伊嘉等と黨友を再び、尙書を支配して、内朝における勢力を確立する。すでに官職の體系はその一元的統制を失い、中央・地方の官僚はこれと結び、或はこれに反撥するいくつかの黨にわかれ、官僚體系における黨派の形成は、その端緒的形態をとる。ついで立った成帝は、この強大化した宦官石顯の勢力を抑えるために、外戚王氏を重用し大司馬大將軍として政をゆだねる。王氏一族は相ついで内朝を支配して、實質的な政權擔當者となり、その權力は再び天子を名目的存在たらしめ、やがてその專横の權力は、王莽の帝位篡奪につづくのである。

このように中央政治機構における實質的政府である内朝の優位と、内朝における政權掌握者として外戚と宦官とは、すでに前漢中期以降、その端緒的形態をとって現われていたのであるが、後漢に入ると、それはより露骨な形をとって前面に出てくる。それは章帝以降、天子が必ず幼主であり、ために母后が朝に臨んで幼主を擁立し、母后がその權を久しくするためには、自己の一族である外戚に權力を與えて、自己をささえる支柱としなければ

ならなかった、という事情による。章帝が死ぬと、これをつぐ和帝が幼小なため、竇太后が朝に臨み、兄の竇憲を大將軍となし、内朝の政權をゆだねたのも、そのためであるし、和帝が死ぬと、鄧太后は、生後僅かに百餘日の殤帝を立てて、自ら朝にのぞみ、兄の鄧騭を車騎將軍に任じ、明年殤帝が死ぬと、鄧太后は、兄の鄧騭とともに策を立てて、十三歳の安帝を迎立して、つづいて朝にのぞみ、鄧騭をさらに大將軍に任じたのも、そのためである。一々の舉例を略すが、同様に、順帝が死ぬと、梁皇后が太后として朝に臨み、兄の大將軍梁冀は太后とともに幼主を迎立して專權をほし、幼主賀帝が自己の意に従わないことをもって之を鳩殺して、十三歳の桓帝を立てて、その專權をほし、そのままにした。私達の問題とする竇武も、桓帝の皇后の竇後の父で、その故をもつて、特に城門校尉を拜して槐里侯に任ぜられ、梁冀のような專横な行爲は見られないが、桓帝が死んで、竇后が太后として朝にのぞむと、嗣子がないので、太后は兄竇武とはかって、十二歳の靈帝を他より迎立して、竇武を大將軍として、政權をゆだねたのである。

ところで、章帝以降、幼帝が多いことは、實は、



太后が朝に臨んで、その一族の外戚と共にその政權を永く維持するために、ことさらに幼弱なるものを、外藩の諸王の子弟から選んで迎立する場合が多かったからで、その殆んどが太后の子ではない。したがって、幼帝が成長すると、内朝における外戚の專權に對し反感をいだいてくるのは當然であつて、その際、天子が頼りとするのは、天子に近侍する宦官である。宦官が天子に直結することをもつて、その權力を次第に増大し、内朝において外戚と對立する勢力をもつことになる。そして、或は天子の暗黙の内意の下に、或は天子に誣告して、外戚を誅殺して、その權力を奪う。上記の章帝以降、内朝における實際の政權の保持者であつた外戚の末路は、その殆んどが、宦官の誅殺によるのは、そのような事情によるのであり、そして、その功によつては宦官は侯に封ぜられて、益々その權力を増大して行くのである。章帝以降の内朝の歴史は、實際の政權の掌握をめぐつての外戚と宦官とのほげしい争ひの歴史であるといつてよい。彼らは、それぞれその勢力を外朝や地方の官僚組織の中に扶植するために、壓力を外朝の官僚や地方官にかけて選舉請託を行い、郷黨の輿論を無視して、自己の一族や、それに

結託する地方豪族の子弟を、官僚層の中に送りこみ、所謂選舉腐敗を一般化し、ここに郷黨の輿論にもとづく、清議をまきおこすことになったことは、すでにさきにてきてきたところである。

さて順帝の永建六年(一三二)太學を修起し、質帝の本初元年(一四六)、梁太后と外戚梁冀の執政下において、太學生は、三萬餘人の多きに達するにいたつた。梁冀の專横に對しても、すでに太學生の上書による批判がなされていたが、桓帝の延熹二年(一五七)、外戚梁冀が、その專横に反撥する桓帝の内意をうけた宦官の單超、左棺・徐璜・具瑗・唐衡によつて誅殺されるにおよんで、その功により萬戸の侯に封ぜられた宦官の勢力は強大となり、私利によつて政權を左右し、その選舉請託はさかんととなり、その一族・支黨による選舉紊亂は、一般化してきた。太學における清議は澎湃として起り、宦官勢力に對する政治批判は、儒教的價值規準からする人物評價の形をとつて、智識階級の間にかわめてさかんとなった。このとき質帝の父竇武は外戚として特に侯に封ぜられると(一六五)、兩宮の賞賜を得て、これを悉く散じて太學生に與えた、という。太學生の間に澎湃としておこつた宦

官勢力批判の輿論をたくみに利用して、内朝における宦官勢力に對抗する外戚としての自己の地位を強化しようとするものではないか。ほどなく桓帝が死ぬと(一六八)、寶后は太后として朝に臨み、父寶武と禁中に策を定め、外藩の十二歳の解濟亭侯宏を選んで、迎立して靈帝とし、寶武は大將軍として政權をにぎることとなる。これは、外戚が自己の政權掌握を永からしめんとする常套手段である。そして一方、清流官僚の領袖陳蕃を太傅に任じ、清流勢力の力を利用して、さらに積極的に宦官勢力の彈壓を行わしめようとする。太學生は、その利用されていくことを知らずにか、寶武を稱讚し、その清議の標榜する三君の筆頭に寶武を列して、「天下の忠誠、寶遊平」と讚美し、遊談、交會に奔走する。彼らの人物評價の儒教的價值規準は、やはり名目化し、外在化した、というべきであろう。外戚は本来、德行・功績の故をもってでなく、ただ太后の外家の故に顯位を與えられたものである。しかも、太后と禁中に策を定めて天子定立の專權をぬすみ、自己の政權維持の私利のために、ことさらに幼弱な外藩の王侯の子弟を迎立することは、天子をして名目的存在たらしめて、これを利用するものに外ならない。

寶武はその人物の具體的性格如何の問題を超えて、少くとも天子一尊の儒教的價值規準からは、そのように批判されるべき存在なのである。涿郡の儒者盧植の寶武に對する諫言は、このような立場からなされているのである(後漢書盧植傳)。そしてまた、このような寶武に對する儒教的價值規準からする批判は、同時に宦官勢力の寶武攻撃に名目を與えることとなるのである。寶武に對してばかりでなく内朝における外戚に對する宦官の反撃は、從來もそのような大義名分の名目をかりて行われてきたのである。太學生が、自ら激して、寶武を清流の筆頭において、宦官勢力の批判に奔走することは、自ら火中の栗を拾うが如き、言動といわなくてはならない。それは、彼らの排斥する宦官勢力にすすんで反撃の名目を與えることであつたのであり、自らの清議を、宮中に鬱積する泥沼のような外戚對宦官の政權争いの中に、すすんで投げ入れることでもあつたのである。そして、程なく、寶武・陳蕃に對する宦官勢力の反撃はそのような名目をかき、靈帝を擁して實行され、寶武・陳蕃は誅せられ、その禍は太學生にまで及んで、あの徹底的彈壓、すなわち第二次黨錮がなされたのである。

儒教的價值規準を單に名目としてでなく、内在的にそれをもつて自己をきびしく律する一部の知識階級が、太學生の清議に批判的であつたのは、單に、その「浮華・交會」の風潮に對してだけではないのではなからうか。太學生の清議における儒教的價值規準の名目化と外在化が、やがて竇武と結ぶような價值規準における自己撞着をもたらず契機を内包していることに、氣付いていたからではなからうか。それ故、かれらは、當時の知識階級の一般的風潮である「浮華・交會」に加わらず、一切の察舉を辭して仕えず、自ら隠れ居したのは、そのような政界と輿論の在り方に對して抗議する殘された一條の道であつたからではなからうか。桓帝の時、安陽の人魏桓が、しばしば辟召されても、仕えず、郷人がこれをすすめても行かず、恬然として、「其れ祿を干め、進を求めるのは、其の志を行う所以也、(しかれども)、今後宮千數、其れ損ず可きか、厖馬萬匹、其れ減ず可きか、左右悉く權豪、其れ去る可きか、桓をして生きて行き死して歸らしむも、諸子において何か有らんや」と云つて、遂に身を隠して出なかつたのは、そのような意圖からであらう。嘗て太學に遊び終身仕えなかつた申屠蟠が、太

學生の「浮華・交會」の風を歎じて、「昔戰國の世、處士横議し、列國の王、箠を擁して先驅す。卒に阮儒燒書の禍有り、今の謂か」といひ、迹を梁碭の間に絶つたのも、上述のような意圖からであらう。仇香が太學において符融を批判し、業を終ても終身仕えなかつたのも、同様な意圖からであらう。そして、胡三省が、通鑑の注において、後漢の太學生を、名を求め利を踏むの徒と解したのも、また陳垣が、南宋三學の横と賈似道の術策とを例證として、胡注の意圖を引き出したのも、同様な立場からする批判ではなからうか。すでに言及する紙數が殘されていないが、王船山もその「讀通鑑論」において、申屠蟠・魏桓の態度を「本を知る」ものとし、陳蕃が竇武に託したことを、「託する所に非ざること明らなること甚だしい」ものに託したとして、これを批判している。それならば、後漢末期の上述のような一部の知識階級の逸民的な批判的態度をささえる社會的基盤はどこにあったのであらうか。それは名教的天下的秩序と現實の國家・社會との乖離を媒介として追求さるべき問題であらうが、今日まだその問題に及ぶ十分な用意がない。今はただ、陳垣の「通鑑胡注表微」を偶目して、中國史學界

の元老に、今日なお脈々として傳わる中國史學の批判的精神の傳統を感じ、その立場に身をおいて、黨錮事件の構造を私なりに整理して見たまでである。

(1) 前漢における内朝と外朝の分離については、拙著「中國古代の社會と國家」第二篇第二章「漢代における國家秩序の構造と官僚」を参照。

(一橋大學教授)